

# いうこときかないやつらの映像社会学

## ——都市に生き働く若者の労働組合実践——

NPO サーベイ・文京学院大学ほか 岩館豊

### 目的・方法

行為者の意味世界を記述・分析するにあたっては、非言語的なものが果たす役割は小さくない。都市に生き、働きながら、労働組合を立ち上げ会社と交渉する若者たちの「怒り」もまた、彼らが発した言葉だけでなく、他の行為者やモノとの関係性や具体的な場所における、表情やふるまい、しぐさといった非言語的なかたちにおいて発現する。彼らは、何に対して怒っているのか。その「怒り」とそれに動機づけられた行為とによって生成する意味世界とはどのようなものか。これらの問いを切り口に、2008年から2016年にかけて実施した若年非正規労働者の労働組合実践に関するフィールドワークをもとに、脱テキスト中心主義的な記述・表現の道筋と可能性を探ることが本報告の目的である。

非正規で働く若者とその友人たち、職場の同僚や管理職、敵対する経営側の弁護士や社労士、組合の活動家や組合員、カフェの店主やそこに出入りする人々。郊外の物流倉庫、都心の雑居ビル内に構えられた労組事務所、独立系カフェといった場所。Tシャツ、ダンボール、パソコン、コピー機、書類の束、印鑑、ビール、タバコ、トラメガ、サウンドシステムカーなどのモノ。組合活動や交渉におけるノウハウや専門知。労働基準法や労働組合法、労働委員会などの法や諸制度。若者たちによって生きられる労働組合とは、多数の人や空間・場所、モノ、知識や制度が相互に作用し合うことによって生成する社会空間である。そこには、日々の労働があり、汗と繊維と染料が混じったにおいがあり、パソコンで文書を作成する音があり、団体交渉後のビールの味がある。Tシャツのプリントを刷る腕があり、労組事務所へ向かう足があり、路上で踊る身体がある。冷徹な資本制のメカニズムによる痛みと怒りがある。戸惑いと疲れがあり、楽しみや喜びがあり、尊厳と誇りがある。

### 結果・結論

若者による労働組合実践のフィールドワークから明らかになったことは、次の2点である。第1に、若者たちの「怒り」とは、静態的なものでも一元的なものでもなく、敵対者や支援者、専門家といった行為者、倉庫や事務所やカフェといった場所やそこに置かれたモノとの関係性のなかで行われる身体的行為によって、その都度生成し変化するものである。そして、そのダイナミクスや多重性を記録・表現するにあたって、テキストだけでなく、映像によるアプローチが有効である。第2に、脱テキスト中心主義的な記述・表現とは、テキストを排除するものでも劣位におくものでもなく、テキストすなわち言葉のもつ意味や文脈をより深く豊かに感受・解釈していくための方途でもあり、したがって非言語的表現と言語表現との相補性をいかに確立していくかが重要となる。

脱テキスト中心主義的な記述・表現の可能性を考えるにあたっては、記述・表現する主体の一人である調査者とその参与のあり方をどう再帰的に考え実践していくかが、あらためて問われる。現場にビデオカメラを持ち込み撮影する調査者とそれによって生産される映像もまた、人や空間・場所、知識、モノや制度の相互作用による社会空間の生成に介入・参与しているからである。他方で、映像による記録・表現においては、テキスト媒体とは違った水準や方法で調査協力者もその過程に介入・参与しうる。この点について報告できる材料はまだ十分ではないが、**art-based** な研究実践過程の多方向性についても議論したい。